

左ノドノル記下

正七位大島貞益 纂譯

エドワルド第六世王ハ、ジヤン、セイモールノ所生

ニレテ其父ノ死後三日ニレテ千五百四十八年

二月二日立テ王ト為ル時ニ年甫ノテ十歳カシ

テルボリーノ教大長クランメル相國リオゼス

レヘルトホルドノ侯セイモール等十六人王

ヲ輔佐シテ政ヲ為シ別ニ議事官十二人ヲ置キ

改正 卷之五 一



テ萬機ニ參セシム是等ノ事ハ皆ヘンリノ第八  
 世ノ遺詔ニ循フナリ又ヘルトホルドノ侯ハ  
 ンノ兄ニシテ王ノ叔父タリ故ニ大臣議シテ之  
 ラ國保ニ任シ其他朝廷百官悉王ノ詔ヲ用キテ  
 改メ命ス後幾ナラスシテヘルトホルドハソメ  
 ルモトノ侯ニ轉進シリオゼスレハハルサン  
 プトンノ侯ニ封セラレ其他貴族封ヲ轉スル者  
 多シ○二月廿八日王即位ノ禮ヲ行ヒ國中ニ大  
 赦ス然レトモノルホルクノ侯ハ獨赦例ノ中ニ  
 在ラス尚繫レテ獄中ニ在リ○此頃舊教ノ徒ニ

ハ王姊マリーヲ頭トシテリオゼスレハガルジ  
 子ル等アリ又新教ノ徒ニハ王姊エリサベスヲ  
 頭トシテソメルモトクランメルリドレラチ  
 メル等アリソメルモトハ固リオゼスレト快  
 カラス二人共ニ要地ニ居ルニ及テ愈相凌轢シ  
 ソメルモト遂ニ之ヲ王ニ讒シテ其官ヲ褫フ是  
 ニ於テ舊教ノ徒俄ニ巨擘ヲ失ヒ且王長スルニ  
 及テ亦羅馬教ヲ斥ケシカハ是ヨリ王ノ世ヲ終  
 フル迄新教盛ニ行ハレ英國ノ法教改革始メテ  
 不拔ノ基ヲ為セリ○千五百四十六年ノ和後ヘ



ンリ一第八世未蘇國ヲ合併セントスル志ヲ廢  
 セス其死ニ臨ミ大臣ヲ集メテ丁寧ニ其事ヲ遺  
 託セリ新主位ニ昇テ内外ノ事少ク定マルニ  
 及テソメルセト其志ヲ繼キ是歲秋兵ヲ以テ蘇  
 格蘭ニ迫リ強ヒテ二國ノ婚ヲ成サンコトヲ請  
 フ時ニマリ一尚幼ニシテビートント云フ者國  
 政ヲ執リシカ此頃ハ改革ノ說未其國內ニ行レ  
 スシテ國人皆英ト婚嫁スルコトヲ好マス加フ  
 ルニ英人ノ動モスレハカラ以テ逼ルヲ憎テ之  
 ヲ謝絶シ鬪國ノ兵ヲ發シテ英軍ヲエスク河畔

ニ迎フソメルセト其力争ス可カラサルヲ知テ  
 更ニ辭ヲ卑クシ女主ノ成長シテ自夫ヲ擇ムニ  
 至ル迄他ニ許嫁スルコト無カラント請ヒシカ  
 北人ソメルセトノ勢屈スルヲ見テ益驕リ又之  
 ヲ允サスソメルセト乃其軍ヲ率キテ南旋スル  
 狀ヲ示レ北人其退路ヲ遮ラントビシキート云  
 地ニ陣ヲ移スヲ待テ水陸之ヲ夾撃シ九月十日  
 大ニ其軍ヲ破リタリ然ルニ會其弟セイモール  
 等議事官ト謀テ己ヲ構陷スト聞キソメルセト  
 急ニ英ニ歸リシヨリ此機ニ乘マルコトヲ得ス



其後幾日ナラヌレテ北人マリト佛ニ送リ其  
 王ニ託ス是ニ於テ英國吞併ノ策再阻敗セリ○  
 ソメルセト蘇格蘭ヨリ歸テ先主法教齊一ノ令  
 ヲ止メ又王ノ命令ヲ以テ直ニ國法ト為ルコト  
 ヲ廢シ其他近世綱紀ノ廢弛セル者ヲ更張ス又  
 千五百四十年ノ間寺院ニ塑像ヲ祭ルヲ禁シ又  
 英語ヲ以テ祭文ヲ誦セシメ羅馬教中惑溺ノ餘  
 習ヲ洗除シテ新教益盛ニ行ハル○ソメルセト  
 ノ弟セイモールハ人トナリ貪婪ニシテ酒色ニ  
 沉湎シ又倭才アリテ善ク人意ヲ迎ヘ先后ガゼ

リンノ賢ト雖之カ為ニ誑カサレテ之ト再醜ス  
 ルニ至レリ此人久レク其兄ノ要地ニ居ルヲ嫉  
 テ二人常ニ相快カラス又ワル多キノ侯シドレ  
 ート云フ者前ノシドレノ子ニシテ其奸惡父  
 ニ劣ラス竊ニソメルセト兄弟ノ不和ヲ悦テ益  
 之ヲ離間シ二人ヲ斃シ己其職ニ代ラシコトヲ  
 謀レリ千五百四十九年セイモールノ奸謀頗ル踪  
 跡アルヲ以テシドレノ子ヲソメルセトニ告ク  
 ソメルセト懼レテ之ヲトウルニ幽シ議院ニ  
 請テ悉其貨財ヲ沒收シ是歲三月二十日遂ニ之



ヲ刑殺ス○法教ノ改革ト世態ト年ヲ逐テ變遷  
 シ加フルニ西洲ノ航路開ケシヨリ金銀ノ輸入  
 夥多ニシテ物價自騰起セリヘンリ一第八世ノ  
 時ヨリ屢貨幣ヲ改鑄シテ其品位下ルコト甚シ  
 ク其他諸種ノ原因アリテ千五百四十九年ノ間  
 諸州ノ小民亂ヲ作シ騷動殆絶ユル時ナシ中ニ  
 就テテボンシールトノルホルクトハ動揺殊ニ  
 甚シデボンシールニハ賊徒ノ聚ルコト一万餘  
 人悉兵器ヲ携ヘ隊伍ヲ編テ官兵ニ敵スル勢ア  
 リ又ノルホルクニテハ多ト云フモノヲ首長

トシテ近隣諸方ヲ亂暴シ其猖獗デボンシール  
 ニ勝レリ是等ノ報告倫敦ニ達セシカハテボン  
 シールニハリセルヲ遣リ又ノルホルクニハ其  
 頃蘇格蘭ニ備ヘ置キタル兵ヲワルキノ侯ニ  
 附シテ發遣シ戰鬥數次ニシテ兩地共ニ鎮定ス  
 ルコトヲ得タリ○ピンキーノ戰ノ後北征ノ為  
 ニ備ヘタル兵ハノルホルクニ轉用スルヲ以テ  
 蘇格蘭其國力ヲ養フ餘間ヲ得佛王又虚ニ乘シ  
 テグーロンヲ復スル計アリソメルセト之ニ敵  
 セントテ日耳曼帝ノ援ヲ乞ヒシカ帝ノ之ヲ肯



サリシニヨリテ假ニ二國ト和センコトヲ欲ス  
 然ルニ議事官中ソメルセトニ怨アル者其力時  
 事ヲ支フルコト能ハサルヲ見テ竊ニ悦ヒ故ニ  
 講和ノ説ヲ拒ミ又傍觀シテ其困厄ヲ救ハスソ  
 メルセトハ元來倨傲ニシテ顯要ヲ貪ルト雖器  
 局狹小ニシテ才氣其志ニ稱ハスワル等キ及サ  
 ウサンプトン、侯等隨テ之ヲ効シ千五百四十  
 九年十二月其官爵ヲ褫テ之ヲトーウルニ投シ  
 尋テ其田宅ヲ没シ又議院ニ請テ二千ポンドノ  
 贖罪金ヲ課ス然レトモ幾日ナラスシテ王之ヲ

獄ヨリ出シ其科金ヲ免シ復漸ク眷顧ヲ加フワ  
 ル等キモ亦其氣勢大ニ碎クルヲ見テ之ヲ憫ミ  
 再議事員中ニ加フルノミナラス又其女ギンヲ  
 迎ヘテ其子リスレト婚姻セシム○ソメルセト  
 在職ノ間ハワル等キハ侯等歎々トシテ其失錯  
 フ咎メシカ佛蘇ノ戰事財庫虚耗シ國勢支分ノ  
 際ニ當テ固ヨリ維持スヘキニ非スワル等キ職  
 フ執テ未幾何ナラサルニ佛國ト和議ヲ開キ佛  
 以四十万クローン貨幣ヲ以テブーロンヲ贖還  
 此條約中亦蘇格蘭ノ名ヲ載セ三國遂ニ兵ヲ



解ス○千五百五十一年ノルサンベランドノ侯  
 死シテ其國除カレワル多キ自請テ此地ニ轉封  
 ス時ニ世人リメルヤトヲ貴重スルコト尚厚シ  
 ノルサンベランド之ヲ見テ復之ヲ忌害シ一日  
 其夫妻ヲ縛シ坐スルニ反逆ヲ以テシ之ヲ獄ニ  
 下シ、カ既ニシテ鞠訊スルニ至テ罪ノ證スハ  
 キモノナシノルサンベランド則曰ク其平日ノ  
 驕傲放恣之ヲ殺スニ足レト牽強シテ獄ヲ成  
 シ千五百五十二年一月二十二日之ヲ刑殺ス侯  
 甚才識アリ幼主ヲ挾テ政權ヲ弄シ其罪大ナリ

然レトモ國人ノ為ニ慕ハレ其死レタル日小民  
 争テ其血ヲ手中ニ醜シ家ニ傳ヘテ遺愛トセリ  
 ト云フ此日リメル多トノ親友數人亦連坐シテ  
 刑セララル然レト死其罪跡皆証左アルニ非ス糾  
 彈甚誣妄ヲ極メタリ○王ハ幼ヨリ尪弱多病長  
 スルニ隨テ漸ク癆瘵ヲ成シ其勢救藥スヘカラ  
 ス時ニ王未ダ后ヲ納レス繼統ノ議亦他ニ定ムル  
 所ナシノルサンベランドノ侯乃徐ニ王ニ説テ  
 曰ク王ノ二姉ハ正室ノ出ニ非ルヲ以テ大寶ヲ  
 嗣クヘカラス且マリ一ヲシテ位ヲ得セシメハ



再舊教ノ惑溺ヲ復スルナリエリサヘスハ此虞  
 ナレト雖既ニマリールヲ除カハ又之ヲ除カサル  
 コトヲ得ス若此ニ女ヲ除カハ位ヲ繼クヘキ者  
 ハ獨佛后ノ統ノミナリ后ノ孫ギングレールハ賢  
 淑ニシテ君徳アリ且此女ノ血統疑フヘキモ王  
 先王ニ倣テ繼嗣ヲ定メハ誰カ敢ヘテ之ニ違ハ  
 ニヤト佛后トハヘンリー第七世ノ女マリール  
 言フナリマリール始佛ニ嫁シテ後其夫死シ又  
 ポルクノ侯ニ嫁レテ一女ヲ生ムギンハ其女ノ  
 所生ニシテ是ヨリ先侯ノ第四子ジドレトニ嫁

ス故ニ侯之ヲ立テ、女王トシ己其岳父トナリ  
 テ益權ヲ張ラント謀レルナリ王幼弱ニレテ之  
 ヲ察セス侯百方浸潤レテ遂ニ其議ヲ成シ、カ  
 幾ナラスシテ王グリーン多チニ於テ死ス時ニ  
 千五百五十三年七月六日壬午年十六在位七年十  
 リ王ハ性質慈惠ニシテ學ヲ好メリ不幸ニシテ  
 世ヲ蚤クシ後世之ヲ歎惜ス

マリールエドワード第六世ノ死セルトキノルサ  
 ンベランド直ニシテホルクノ侯等數人ヲ從ヘテ  
 シオンハウニス至リギンクレールヲ禮シテ冊立



ノ意ヲ陳スシオンハウスハギン、住セシ家ナ  
 リギンハ此時僅ニ十六歳固ヨリ深閨ノ一女子  
 ニシテ初ヨリ其舅父等ノ奸計ヲ知ラス此ニ至  
 テ始メテ驚キ別ニニ王姉ノ在ルヲ言ヒ且不義  
 ノ榮華ハ欲スル所ニ非スト之ヲ辭セレカ元来  
 其性順柔ナルヲ以テ舅氏ノ為ニ威逼セラレ又  
 其夫ニ説諭セラレ強ヒテ之ヲ拒ムコト能ハス  
 終ニ其意ニ従フ是ニ於テ六月九日國內ニ令レ  
 テ新主ノ代立ヲ布告セシカ倫敦近傍ノ外ハ敢  
 ヘテ其命ヲ奉スル者ナク僅ニ之ヲ奉スル者ア

ルモ市街寂然トシテ一人ノ歡呼萬歳ヲ唱フル  
 者ヲ聞カス或ハ布告ノ文ヲ見テ之ヲ唾罵スル  
 ニ至レリ○初先王ノ死ニ臨テノルサンベラン  
 ド陰ニマリトヲ執ヘント使ヲ遣テ王ノ危篤ヲ  
 告ケ速ニ来テ死床ニ侍センコトヲ請フマリ  
 乃チ直ニ途ニ上リ既ニダリイン奪チヨリ半日程  
 ニ至リシ頃一人ノ使者書ヲ持レテ遽シクマリ  
 一ノ從者ニ獻スル者アリマリー之ヲ披キ見レ  
 ハ中ニアリシデルノ候某ノ名アリテ王ノ死ヲ  
 赴ケ且ノルサンベランド隱謀ノ狀ヲ詳載ス是

改正英史 卷五 九



ニ於テマリリー急ニ路ヲ轉シテソポルクニ退キ  
 人ヲ倫敦ニ馳テ議事官ニ命シテ己ガ代立ヲ布  
 告セシメタリ是ニ於テ近傍ノ小民ソポルクニ  
 至テマリリーニ從フ者陸續絶エス倫敦ノ市人モ  
 既ニマリリーニ左袒スト聞エシカハノルサンバ  
 ランド忽憂懼シ急ニ兵ヲソポルクニ進メント  
 スレトモ其勢寡弱ニシテ戦フニ足ラス又議事  
 官ノ援ヲ請ヒシカ此輩亦既ニマリリーヲ奉シテ  
 其言ヲ顧スソポルク侯ハ兵ヲ率キテ倫敦ヲ守  
 リシカ倉皇ノ間其兵ト共ニマリリーニ降リシカ

ハノルサンバランド愈狼狽シ七月二十日終ニ  
 マリリーノ捕隸使ニ至テ自縛ニ就キ同二十五日  
 倫敦ニ送テ幽セラル其他ソポルクリドレー及  
 ジン等亦皆同時ニ獄ニ投セラレタリ是ヨリマ  
 リー軍ヲ整ヘテ倫敦ニ向ヒ途中ニシテ其妹エ  
 リサベツスノ千騎ニ將トレテ出迎フルニ遇ヒレ  
 カハ其兵ヲ合セテ八月三日都下ニ入り悉ク反逆  
 ニ連係セル者ヲ處分シ其後二十二日ノルサン  
 バランドノ罪ヲ論シテ之ヲ斬殺ス其他死刑ヲ  
 受クル者僅ニ二人アリ議事官貞ハ一旦逆ニ與

改正  
 十  
 八



シタレトモ固ヨリ其本意ニ非サルコトヲ陳シ  
ケレハ其罪ヲ赦シテ問ハス又リドレドシ等  
以下皆赦例ノ中ニ在リ○王即位ノ時年三十七  
歳其性素ヨリ雍和ナラス幼ヨリ母后ノ廢黜ニ  
坐シテ屢艱苦ヲ嘗メ加フルニ舊教ヲ奉スルヲ  
以テ先王ニ疎斥セラレ此等ノ故ヲ以テ其陰險  
益加ハレリ位ニ昇テ主トシテ意ヲ法教ノ復古  
ニ銳クシ始メテ倫敦ニ入リレ時直ニトール  
ニ至テ前王ノ間法教ノ事ニ坐シテ繫獄セラレ  
シ者ガルガ子ルノルホルク等ヲ釋レ、カ其後

更ニラチメルコブルデー等新教ノ首領ヲ執  
ヘテ獄ニ下シ多ク前王ノ法律ヲ改メ國內ニ令  
レテ再舊教ノ諸禮ヲ舉行ス是ニ於テ舊教ノ徒  
ハ再世ニ出テタル思フ為レ羅馬法王モ亦使者  
ヲ遣テ新主ノ代立ヲ慶賀スタランメルハ新舊  
ノ柱石トシテ三朝ニ歷事シ衆人ノ為ニ仰望セ  
ラレシカ此回獨繫獄ノ禍ニ免レシヲ以テ道路  
往々其阿合ヲ議スル者アリクランメル此事ヲ  
傳聞シテ心ニ愧チ群疑ヲ免レン為ニ書ヲ作テ  
舊教ヲ極詆セシカハ王怒テ又之ヲ獄ニ投ス其



後王クラシムルヲ鞠問シ嘗テ密ニギンノ逆ヲ  
 助ケタリトテ坐スルニ及逆ノ罪ヲ以テシ其刑  
 既ニ定リシカ既ニシテ王又其期ヲ緩クレギン  
 等ト共ニ之ヲ獄裏ニ幽ス○十月一日王即位ノ  
 禮ヲ行ヒ同五日議院相會シ王ノ正嫡ニシテ大  
 統ヲ受クヘキコトヲ定ム此會中又法教ニ關シ  
 タル律令エドワルド第六世ノ朝ニ發行レタル  
 者ハ悉之ヲ止ム○此時ニ當テ日耳曼ノ帝キ  
 ルス第五世其子西王ヒルプノ為ニ女王ヲ娶ラ  
 ントノ議アリ然ルニヒルプ殘忍刻薄ニシテ君

戴スヘカラサルノミナラス且日帝若舅氏ノ威  
 ラ挾テ英國ノ事ヲ鉗制セハ英ハ竟ニ其奴隸ト  
 ナル可キ懼アリケレハ議院ヲ首トシテ國人深  
 ク之ヲ好マス又ヒルプハ年僅ニ二十七歳ニシ  
 テ女王ヨリ弱キコト十一歳ナリシカ王獨斷然  
 トシテ其議ヲ允聽セリ是ヒルプハ舊教ノ徒ナ  
 ルヲ以テ強援ト為シコトヲ欲スレハナリ是歳  
 冬婚媾已ニ近キニアリ加フルニ法教ノ為ニ困辱  
 セラル、者益多カリケレハトマス、卒乃トペー  
 トルカ、等相謀テ亂ヲ作シ卒乃トハケント



ニ起リカミールハデボンシールニ起リ又ルボル  
 クノ侯ヲ勸ムルニギンノ復辟ヲ以テシテ中國  
 ニ起ラシメテ千五百五十四年一月三方一時ニ事  
 ヲ發シ、カ幾何ナラスシテ罪魁悉捕ヘラレ刑  
 ヲ受クル者六七人アリ王妹エリサヴスハ法  
 教ノ故ヲ以テ久シク女王ノ為ニ属目セラレシ  
 カ王今田ノ事機ニ投シエリサヴスモ亦之ニ與  
 カレリトテ之ヲ鞫問レ既ニ奇禍ニ及ハントセ  
 シカ僅ニ死ヲ免レテ其後クトドストクニ禁錮  
 セラル又ルボルクノ罪戾其子夫妻ニ連及シテ

二月十二日ギン、グレー其夫ジトレート共ニ刑  
 セラルグレーハ幼ヨリ書ヲ好テ博ク古語ニ通  
 レ嘗テ舅父ノ惡ニ與セサリレニ不幸ニシテ玉  
 石共ニ碎ケ罪ナクシテ其身ヲ喪ヘリ其死ニ臨  
 テ人ニ語テ曰ク我今ニシテ固ク王位ヲ辭セサ  
 リレテ悔ユ然レトモ我此ニ至リシハ阿爺ノ命  
 ニ違ハンコトヲ懼レテナリト從容トシテ戮ニ  
 就クト云フ其父ルボルク等亦幾モナクシテ刑  
 セラレ其他貴族都人王ノ嫌疑ヲ蒙テ獄ニ下ル  
 者數ヲ知ラス牢獄之カ為ニ填咽ス〇千五百五

改正  
 十五



十四年七月廿日西班牙王ヒリッポ英ニ入り同二  
十五日卒ニ左ストルニ於テ遂ニマリート婚ス  
ヒリッポノ人トナリ倨傲ニシテ大臣ヲ侮慢シ威  
儀ヲ飾テ輒ク人ト言語セス是故ニ居ルコト久  
シカラスシテ國人之ヲ惡ムコト益甚レ女王亦  
所願ヲ遂クルコトヲ得タレトモ琴瑟和ヲ失テ  
期スル所ノ如クナラス王ハ意ヲ傾ケテ其歡ヲ  
得ンコトヲ欲スレトモヒリッポハ王ノ舉止鄙野  
ナルヲ憎テ之ヲ視ルコト蔑如タリ唯其議常ニ  
能ク相挾フハ獨法教ノ一事ノミナリ此時ガ

ジ子ル第一等ニストルニ居テ相國ノ位ヲ攝  
子同氣相合シテ共ニ法教ヲ力攻シ新教ノ徒ヲ  
異端ト名ケテ之ヲ苛刻シ其慘毒言フ可カラス  
是歲九月法王カルジナールボールヲ英ニ遣テ  
法教ノ監使トシ其後議院監使ニ對レテ久シク  
方向ヲ誤リタル罪ヲ謝シ悉古來嚴酷ノ法ヲ復  
ス是ニ於テ衆庶王ノ不仁ヲ謗議シ道路之カ為  
ニ嘖々タリ○ヒリッポ自ラ人心ノ歸セサルヲ知リ  
多ク恩惠ヲ施シテ之ヲ懷ケント巨儒名士ノ囚  
獄セラレシ者ヲ放遣シ又エリサッスノ禁錮ヲ



釋キ女王ヲ喻レテ宮ニ還ラシム然レトモ其意  
 別ニ思フ所アリエリサダス若ク非命ニ死セハ位  
 ヲ繼ク者ハ蘇ノ女王マリリーナリマリリーハ佛王  
 ノ姪ニ當レリ故ニ佛王因テ以テ英ノ國事ニ容  
 喙スルコトヲ得ハ己カ利ニ非サルヲ計リシナ  
 リ○千五百五十五年二月四日ロジルスヲ焚キ  
 同九日フーブルヲ焚キ其他數人相踵テ焚殺セ  
 ラル此輩并ニ新教ノ徒ニテ其說ヲ固執スルカ  
 為ナリ始ガルジ子ル酷律ヲ設ケテ下民ヲ脅カ  
 シ謂ラク數人ヲ嚴刑ニ處セハ他ハ隨テ懾服ス

ベント然ルニ此策大ニ違ヒ其法愈酷ニシテ民  
 愈之ニ背キンカハ遂ニ自退キホン子ルヲ進メ  
 テ己ニ代ラシムボン子ルハ舊教ノ巨擘ニシテ  
 其初ガルジ子ル等ト共ニ囚獄セラレシ者ナリ  
 其刺烈ガルジ子ルニ比スレハ更ニ甚シク常ニ罪  
 人ノ苦楚ヲ見ルヲ樂ミ自創手ト為テ人ヲ斬殺  
 スト云フ此人教徒ノ黜罰ヲ掌リシヨリ其政令  
 一層ノ毒ヲ増シ蒸民生ヲ聊マス是ヨリ後三年  
 ノ間教徒ノ焚殺セラレ、者總計二百七十餘人  
 無知ノ嬰兒モ亦其中ニ在リ然レトモ是等ノ事



獨、ボン子ルノ之ヲ擅ニセルニ非ス又王ノ意ニ  
 出ツルナリ時人王ノ好テ人ノ血ヲ流スヲ以テ  
 血王マリート云ヘリ○是歳十月十六日リトレ  
 一及ラチメルニ人同時ニオキスホルドニ於テ  
 焚殺セラルラチメル大柱ニ縛セラレ既ニ目前  
 ノ柴薪ニ火ヲ點スルヲ見テリドレニ謂テ曰  
 我輩今日英國內ニ一大燭ヲ點ス其光輝永世滅  
 セサルヘシト英國ノ法教今ヨリ却テ熾ナラン  
 トノ意ナリ火既ニ烈ナルニ及テ相顧ミテ互ニ  
 獎勵ニ欣然トシテ死ス其後千五百五十六年三

月十八日クランメルモ亦オキスホルドニ焚殺  
 セラル初母后ノ廢セラル、ニ當テ王クランメ  
 ルノ其議ヲ賛成セシラ憤テ生長ノ後忘ル、コ  
 ト能ハス其後クランメル屢、硬言レテ王ノ意ニ  
 觸忤レ王ノ之ヲ忌ムコト愈甚シ其獄ニ投セラ  
 レテヨリ王異端ノ罪ヲ以テ之ヲ處セント久シ  
 ク既ニ決定セラレカ尚深ク之ヲ屈辱セント死  
 ニ就カシムル前密ニ人ヲ獄中ニ遣テ曰ク若志  
 ヲ改メ教ヲ變セハ舊勲ノ故ヲ以テ特ニ其命ヲ  
 助ケント時ニクランメル久シク牢獄ノ中ニ在



テ神氣消耗シ加フルニ資性剛毅ニ乏シク深ク  
 死ヲ性ルハ心アリ愁悶ノ中忽<sub>チ</sub>是言ヲ聞キ一線  
 ノ活路開ケタリト遂ニ平生ノ持論ヲ翻シ自<sub>ラ</sub>其  
 名ヲ謝表ノ後ニ書レ舊教ヲ奉レテ餘喘ヲ保タ  
 レコトヲ請フ然レトモ王ノ意猶未<sub>ダ</sub>慊ラス又ク  
 ランメルヲ某教院ノ中ニ誘ヒ至テ稠人ニ向ヒ  
 其過ヲ謝セシメ明ニ其醜態ヲ世ニ曝シテ後俄  
 ニ其焚殺ヲ令ヲ發スクランメル未<sub>ダ</sub>之ヲ知ラサ  
 リレカ始テ覺悟レテ大ニ擔ヲ改メシヲ悔イ令  
 下ルニ及テ驚カス刑ニ臨ミ自<sub>ラ</sub>其右手ヲ火中ニ

燒キ屢大呼シテ曰ク此手我ヲ過テリト悉<sub>ク</sub>其靡  
 爛シ盡クルヲ見テ又快ト呼ヒ死ニ至ル迄顔色  
 自若トシテ殆<sub>ト</sub>烈火ノ其身ヲ燔クヲ知ラサルカ  
 如シ○千五百五十五年十月ヒル<sub>ク</sub>プ國ニ歸テ涅  
 達蘭ノ讓ヲ受ク是ヨリ先ヒル<sub>ク</sub>プ愈女王ヲ厭ヒ  
 シカ此ニ至テ竊ニ悦ヒ王屢書ヲ寄セ物ヲ贈テ  
 其歸ヲ促セトモ棄テ、顧ミス千五百五十七年  
 ニ至テ西班牙佛國ト兵ヲ構ヘヒル<sub>ク</sub>フ英ニ來テ  
 援ヲ請フ然レトモ議院他國ノ故ヲ以テ覺ヲ隣  
 邦ニ啟クヲ難カリ之ノ肯セスヒル<sub>ク</sub>プ乃マリ



ヲ脅カシテ曰ク英國若此戰ニ與セスハ我決シテ再英ノ地ヲ履マシトマリ一之ヲ聞テ悲泣シ遂ニ議院ニ哀乞シテ兵士一万ヲ出シ是歳ペンフックノ侯ヲ將トシテ之ヲ涅達蘭ニ進ムヒリッ  
 プ乃之ヲ合シテ八月十日佛兵トセント、クエンチンニ戰ヒ大ニ之ヲ敗リタリ然ルニヒリッ  
 英ノ手ヲ借テ佛ノ兵ヲ挫キ袖手シテ其利ヲ収ムルノ計ナルヲ以テ大捷ノ後事ニ託シテ觀望シ英軍ト相策應セズ是ヲ以テ英ノ勢孤立シ翌年一月七日カレイ佛將ゲスノ侯ノ為ニ襲ハレ

テ陷没スカレイノ地形四方ニ沼ヲ帯ヒ燥土ノ城ニ通スルハ唯一條路ノミニシテ二箇ノ別堡ヲ以テ之ヲ守レリ從前英人地勢ノ險ヲ恃テ嚴ニ守備ヲ設ケス佛人牒知シテ之ヲ圍ミ纔ニ八日ニシテ之ヲ拔ケリエドワルド第三世ノ始メテ是邑ヲ降シ、ヨリ英人ノ手ニ屬セルコト大凡二百四年ニシテ遂ニ又佛人ノ為ニ奪還セラ  
 ル○初王衆議ヲ排シテ兵ヲ起シ地ヲ失フノミナラス又ヒリッ  
 プノ為ニ賣ラル、ヲ知り慚忿措カス是ヨリ前既ニ病ニ罹リシカカレイノ報ヲ



聞テ病勢遽ニ激シテ終ニ起タス死ニ臨ミ悵然トシテ歎シテ曰ク我死セハ試ニ我腹ヲ剖ケヨ心上必カレイノ字ヲ銘セシト千五百五十八年十一月十七日ヲ以テ死ス年四十三在位僅ニ六年也其妹エリサベス繼立ス王權勢威カラ以テ下ニ臨ミ刑罰ヲ以テ人心ヲ齊クセントス故ニ民心服セスクランメル諸人ノ刑セラレテヨリ道路目ヲ側テ初暫ク舊教ニ循ヒシ者モ往々新教ニ歸往スル者アリ王ノ刑法愈苛刻ニシテ新教ノ氣焰愈熾ニ畢生ノカラ用キテ終ニ之ヲ撲

滅スルコト能ハス果シテリドレーノ言ノ如シ

○王ノ世ニ當テアルチアゼル俄羅斯ノ航路

始メテ開ケ俄帝使ヲ英ニ遣テ好ヲ修ス是俄國

歐洲ニ交通スル權輿ナリ

エリサベス王ハアインボリオン后ノ腹ニ生レハ

シリノ第八世ノ第二女ニシテ位ニ昇ル時年ニ

十五歳ナリマリーノ死ニ當テ王ハット存ールド

ニ在リ此日都下ノ市入群ヲ為シテ直ニ王ノ所

ニ赴キ同二十四日王ヲ環擁シテ之ヲ倫敦ニ奉

入ス王長面隆鼻舉止敏達ニシテ少時ヨリ極メ



テ人望アリ國人其代立ヲ傳聞シテ皆歡呼踊躍  
 セサルハ無シ王夙ニ新教ヲ奉スト雖又甚舊教  
 ヲ斥セス群臣ノ賀ヲ奉スルニ當テ舊教僧徒ノ  
 謁見スル者温言ヲ以テ之ヲ優待ス但ボン子ル  
 ノミ顔ヲ及ケテ一言ヲ接セスト云フ又議事官  
 負及其他ノ大臣大抵ハマリノ時ノ人ヲ用キ  
 テ變更セス然レトモ其權ヲ平均セシム為ニ別ニ  
 新教ノ徒ニ命シテ庶政ニ參セシム其中會計總  
 裁ニコラス、ベニコン國事總裁ホルム、セセル  
 等アリベニコンハ即大學士ベニコンノ父ナリ

○千五百五十九年一月十三日即位ノ禮ヲ行ヒ  
 同二十一日公會王ノ繼承ヲ定ム議院又王ノ意  
 ヲ承ケテ國王ヲ以テ教主ト為ルノ律ヲ復シ再  
 法教齊一ノ令ヲ發シ其禮拜ノ法祭祀ノ式等大  
 抵改正シテ法教ノ體裁復エドワルド第六世ノ  
 舊ニ歸ス○西王ヒリッパ尚英國ノ事ヲ管轄セシ  
 コトヲ欲シ王ノ代立ヲ聞キ再婚ヲ求メシカ王  
 國人ノ之ヲ好マサルヲ察シ其請ニ應セス王又  
 自ラ用キルヲ好シ他人ノ牽制ヲ恐レテ夫ヲ納ル  
 ルコトヲ欲セス後年ノ間諸國ノ君主屢意ヲ致



ス者アリ王亦頗情ヲ動カレハコトアレトモ其  
 議一モ完成スルニ至ラス千五百七十九年アン  
 ジー侯ノ聘ヲ納レ盟書ヲ贈ルニ及テ又俄ニ之  
 ヲ破ルト云フ○マリーノ死セシ時方ニ佛國ト  
 和ヲ議セシカ王即位ノ年其和成リ佛王カレイ  
 ヲ保有シ八年ノ後之ヲ返サント約ス然レトモ  
 佛王素ヨリ其約ヲ踐ムニ意ナク英人モ亦再之  
 ヲ得ルコトヲ期セス是ヨリ此地永ク佛ノ版圖  
 ニ復ス○佛國ト和シテノ後英國亦蘇格蘭ト和  
 シ是ニ於テ三國再親交ヲ結ヒシカ幾ナラスシ

テ佛王ノ世子ヲラシニス蘇ノ女王マリーヲ娶  
 テ纒端再啟ケタリ此マリーハヘンリー第七世  
 ノ玄孫ニシテ其血胤甚近キヲ以テ先王マリー  
 其覬覦ノ心アラシコトヲ疑ヒ既ニ之ヲ仇視セ  
 シカ果シテ此女佛國ニ嫁スルニ及テエリサベ  
 スハ廢后ノ子ナルヲ口實トシ其夫ニ英王ノ號  
 ヲ冒サレメ自英ノ后ト稱シテ服飾器具皆英ノ  
 徽號ヲ用キシカハ英王深ク之ヲ忌ミ機ヲ伺テ  
 禍根ヲ絶タントセリ是ヨリ前蘇格蘭ニ於テハ  
 新教ノ激徒攝政ビートンヲ暗殺シテ遂ニ舊教

〇



ノ徒ト兵ヲ構ヘ舊教ノ徒佛ノ援ヲ怙テ新教ノ徒ヲ虐シケレハ千五百五十九年新教徒人ヲ英ニ遣テ援ヲ請フ是ニ於テ王竊ニ之ヲ悦ヒ千五百六十年一月戦艦ヲ送テ内地ノ兵ニ赴援シ同年七月ニ至リ終ニ佛兵ヲ國外ニ驅逐シ且佛王夫妻ニ迫テ英王ノ號ヲ去ラシム○王意ヲ内國ノ政治ニ委テ國債ヲ減シ金貨ヲ改鑄シ其他歷代ノ弊政ヲ匡正スル所多シ王亦始メテ火藥ノ製造ヲ國人ニ教ヘ屢民兵ヲ檢閲シ又大ニ海軍ノ數ヲ増加シテ兵備大ニ整ヒ紀綱大ニ振フ王

又人才ニ富ミ其宰臣ボルレ即セ及ワルレシハム等皆清廉多才ノ人ニシテ王ヲ裨補セル所多シ○マリ佛國ニ嫁レテ後久シカラステ佛王死シ其夫立テフランシス第二世ト稱セシカ其後一年餘ニシテフランシス亦死シ其弟カイルス政ヲ攝レ其國ニ分レテ新教ノ首領コング及コリグニ等英王ノ援ヲ請ヒハーブルノ邑ヲ英ニ納レテ其中兵ノ地トセシム然レトモ其後二黨ノ首領或ハ暗殺セラレ或ハ虜トナリテ遂ニ和ヲ結ビ英王亦ハーブルノ邑ヲ保タシ



トセシカ適疫癘ノ行ハル、ニ會テ守ヲ撤シテ  
 其軍ヲ旋・シム○千五百六十二年僧官會議シ  
 テ教律三十九條ヲ定ム是ヨリ後今ニ至ル迄變  
 更スル所ナレ故ニ後世史家之ヲ以テ英國法教  
 改革ノ結尾トス○フランシスノ死後マリー母  
 后ト相愜ハスレテ蘇格蘭ニ歸住シ年五百六十  
 五年從弟ロルド、ダル・ヒリーニ再黜シ之ニ王號  
 ヲ奉テ自、其后ト稱ス然レトモダルンリー輕躁  
 ナルヲ以テ久シカラスレテマリー之ヲ厭ヒ別  
 ニ伶人リジオト云フ者ヲ嬖レテ内外頗物議ア

リ王リジオノ后ニ通スルヲ疑ヒ一夕其后ト會  
 食スルニ當リ數人ノ惡漢ヲ率キテ室内ニ突入  
 シ背ヨリ之ヲ刺殺ス是ヨリ夫妻反目セシカ后  
 ダルンリーグラスゴリーニ於テ痘ヲ患フルニ當  
 リ后一日其病ヲ候シ此地ハ喧鬧ニシテ病ヲ養  
 フニ便ナラストテエジンボロリーニ誘ヒ歸リ閑  
 寂ノ地ヲトシテ王ヲ移シ自、其湯藥ニ侍シテ忽  
 舊怨ヲ忘却スルカ如シ然ルニ千五百六十七年  
 三月九日后ノ侍女ニ婚ヲ結フ者アリ后自、其席  
 ニ臨マサルヲ得ストテ其夜王ニ辭シテ城中ニ



歸リシカ翌曉第二時ニ至テ都下急ニ騷擾シ火  
 アリ々々ト呼フ者アリ市人皆驚キ至テ救ヘハ  
 即チ王ノ病室ニシテ王ノ寢所火藥ノ為ニ破裂シ  
 其死屍ハ飛テ遙ニ遠所ニアリ此時國人既ニ后  
 テ疑フト雖未之ヲ明言セサリシカ是歲五月十  
 五日マリイ又ボスエルノ侯ト婚ス侯ハマリ  
 ノ嬖臣ニシテダルンリイノ死セシ時最衆人ノ  
 為ニ屬目セラレシ者ナリ故ニ國人后ヲ疑フコ  
 ト此ニ至テ愈深ク貴族遂ニ兵ヲ舉ケテ后ヲ執  
 ヘ七月二十九日逼テ位ヲ其子ゼームスニ傳ヘ

シム是即ゼームス第六世ナリ然レトモ國人尚  
 ハマリーニ通スル者アリ翌年五月之ヲ獄ヨ  
 リ奪ヒラングサイドニ於テ攝政モルレイノ兵  
 ト戦ヒシニ其軍再破レケレハ后貌ヲ變シテ英  
 ノ北鄙ニ遣レ書ヲ贈テ英王ノ憐ヲ請フ初マリ  
 一英王ノ號ヲ用キシヨリエリサベッス未ダ釋然タ  
 ルコト能ハス故ニ今一時窘窮シテ来リ投スト  
 雖英王真ニ之ヲ庇護スル意ナク又後患ヲ懼レ  
 テ放遣スルコトヲ欲セス乃チ唱言シテ曰クマリ  
 一變故ニ遭遇シ来テ我哀ヲ請フ我之ヲ棄ツル



ニ忍ヒス然レトモ夫ヲ殺スハ大罪ナリマリー  
 先ッ此罪ヲ白スルニ非スハ我亦之ヲ見ル可カラ  
 スト是ニ於テマリー自其罪ヲ白セント請ヒケ  
 レハ王書ヲ蘇格蘭ニ贈テ其由ヲ傳ヘ法衙ヲ開  
 テマリーノ罪ヲ糾彈セシニ蘇人ノ出セル證左  
 中ニマリーヨリボス立ルニ贈リタル艶書數通  
 アリ中ニ隱謀ノ事ヲ詳載シテ罪跡甚明白ナリ  
 王又言テ曰クマリーノ罪狀既ニ斯ノ如シ我終  
 ニ之ヲ許スコトヲ得スト官吏ニ命シテ之ヲ獄  
 ニ投セシム然レトモ蘇格蘭ニ内亂アリト雖固

ヨリ英ノ關涉スル所ニ非ス况ヤマリー罪アリ  
 ト雖王ニ於テ之ヲ禁錮抑留スルコトヲ得ス是  
 故ニ國人王ノ安置ノ過當ナルヲ憎テ屢マリー  
 ヲ赦ハント謀リ外國ノ諸王亦英王ノ不仁ヲ咎  
 メテ是ヨリ國內多事ナリ○是歲ノルホルクノ  
 侯竊ニマリーヲ娶ランコトヲ欲レ王ノ許サハ  
 ルヲ量テ多ク黨類ヲ集メ勢ヲ以テ迫ラント謀  
 リレカ事露レテ執ヘラレ十月十一日トール  
 ニ幽セラル然レトモ久シカラステ王又之ヲ  
 放免スト云フ○ノルホルクノ餘黨ニノルサン



ベラント及空ストモールランドノ侯等アリ此輩ハ皆舊教ノ徒ニシテ其意獨マリトヲ救ラニ止ラス之ヲ擁シテ再舊教ヲ興サントシテ千五百六十九年一月二人北方ニ於テ亂ヲ作レ、カ遂ニ官兵ノ為ニ敗ラレテ刑セラル、者甚多レ○西班牙及佛國ハ竝ニ舊教ノ國ニシテ此頃頻ニ新教ノ徒ヲ虐レ又マリノ屈辱ヲ憤テ密ニ英國不軌ノ徒ト謀リ英王ヲ危セントス故ニ英王陰ニ二國ノ新教ヲ助ケテ互ニ相保持シ之ヲ以テ其勢ニ抗セントセリ佛國ニテハ教徒一旦和

ヲ結ヒダレトモ其後内亂再起テ戦鬪止マヌ千五百七十年キールス第九世偽テ新教ノ徒ト和シ又使ヲ英ニ遣テアレンザリノ侯ヲ以テ英王ト婚セント請ヒケレハ王亦之ヲ許諾シテ二國ノ間日ニ其商議アリ然レトモ二人共ニ此婚ニ意アルニ非ス時ニキールスハ新教ノ徒ヲ欺テ其類ヲ珍ツノ計アリ故ニ之ヲ以テ其心ヲ安セントス英王モ亦二國親睦ノ體ヲ示シ一ハマリノ黨ヲ挫キ一ハ西王ヒルッポノ望ヲ破ラントスナリ○是ヨリ先西班牙ニテハーノ公辭ヲ設



ケ之ヲインクワイヰト名ケテ法教ノ訴  
 ヲ斷シ日ニ新教ヲ徒ラ焚殺シテ其酷害實ニ全  
 歐洲ニ冠タリ又涅達蘭ノ都督ニアルバノ侯ト  
 云ノ者口ヲ法教ニ藉テ其居民ヲ苦メ僅ニ六年  
 ノ間ニシテ一万八千人ヲ殺セリ斯ノ如ク暴虐  
 ナリケンハ國人離叛シ國ヲ去テ禍ヲ免ル者  
 陸續絶エス英王悉之ヲ容レテ各生産ヲ得セシ  
 メ又商船アルバノ貨財ヲ載セテ英ノ港内ニ碇  
 泊スル者ハ悉之ヲ剽劫ス是ニ於テアルバ密ニ  
 ノルホルクノ侯等ヲ啖シテ又マリーヲ擁立セ

シメ外ヨリ兵ヲ以テ之ニ應シ直チニ倫敦ニ至テ  
 王ヲ窘メント約セシカ會ノルホルクノ家隸ニ  
 訴ヘ出ツル者有テ其事發露レ千五百七十二年  
 侯等首謀ノ者皆誅ニ服スマリーヲ捕ヘテヨリ  
 内外ノ變治ニ起リ王其煩擾ニ堪ハス嘗テ之ヲ  
 放還セントシ蘇ノ攝政モルレト之ヲ謀リシ  
 カ其議遂ニ果サス今回ノ事議院又根株ヲ究鞠  
 シマリーノ罪ヲ正シテ後患ヲ杜ガント請ヒレ  
 カ王又決スルコト能ハス却テ其書ヲマリーニ  
 示シ又議院ニ諭シテ一切マリーノ事ニ於テ言



ヲ出スコト無クシム○千五百七十年佛王  
 ルス新教ノ徒ト和シテ後百方其徒ヲ都下ニ誘  
 致シ千五百七十二年八月二十四日夜一時ニ之  
 ヲ掩殺シ又急ニ令テ諸州ニ傳ヘテ所在屠戮シ  
 良莠令タス佛國ノ新徒之カ為ニ殆空シ王使者  
 ヲ英ニ遣テ曰ク新教徒亂ヲ謀テ政府ヲ覆ヤン  
 コトヲ欲ス故ニ悉之ヲ誅戮シタリト英王固ヨ  
 リ明ニ其偽ヲ知リ國人皆憤怒シテ兵ヲ起シ之  
 ヲ救ハント切齒扼腕セシカ王之ヲ許サス温言  
 慰問シ又佛王ノ請ニ從テアレンコンノ侯ト新

婚ヲ議ス○是歲涅達蘭ニ於テハゼーランド及  
 ホルランドノ二州オレンジノ部長卒ルレムヲ  
 將トレテ遂ニ西班牙ニ反キ悉其地ヲ以テ英ニ  
 屬セシト請フ後ニ至テ和蘭ト稱スルハ是ナリ  
 然レトモ英王西班牙ト釁端ヲ啟カンコトヲ恐  
 レテ之ヲ許サス此時ニ當テ英ハ新教ノ國ヲ以  
 テ西佛二國ト對峙シ加フルニ西ニハ日耳曼ノ  
 強援アリ蘇格蘭亦常ニ佛ト相結テ其隙ヲ窺フ  
 故ニ西ト佛トノ事ニ於テハ王輕シク手ヲ下サ  
 ス然レトモ其後バタビヤ及フランドルス中ノ



諸州和蘭ノ會盟ニ加テ其勢漸ク盛ナリケレハ  
 千五百七十七年王遂ニ和蘭ト好ヲ結ヒ歩騎凡  
 六千人ヲ遣テ其義舉ヲ助ク○千五百七十七年  
 英人フランシスドラークト云フ者四艘ノ船ヲ  
 率キテマダラノ海峡ヨリ南海ニ進ミ西班牙  
 ノ屬地ヲ鹵掠シ其貨財ヲ奪テ直ニ海上ニ逃去  
 スドラーク是ヨリ大西洋ニ歸ランコトヲ欲セ  
 シカ西班牙人ノ為ニ要撃セラレレコトヲ懼レ  
 テ更ニ大西洋ヲ横裁シ東印度ニ出テ喜望峰ヲ  
 繞リ英ニ達ス是英人ノ地球ヲ環航セシ始ナリ

是ヨリ前千五百二十一年九月葡萄牙人マダラ  
 入ト云フ者西班牙ノ船ニ駕シテ始メテ南  
 島ニ至テ二人ノ為ニ擊殺セラレ其禪將ゼバ  
 ス東印度ヨリ本國ニ歸ルセリマダラ九月ニ至  
 リ墨利加洲ノ極南ニ在テ此ノ名ヲ取リタル  
 ナリ又此ノ甚々太平洋ヲ航スルニ當テ天氣清和ニ  
 レテ舟中甚々平穩ナリト云フ以テ此名ヲ下セリ  
 太平洋ハ原語ハ平穩ト云フ直譯スレハ平穩  
 ノ義○西班牙及佛國動亂ノ間英國ハ内外靜謐  
 ニシテ殆ト記スヘキコトナレ大抵王ノ政ヲ為ル  
 ハ嚴厲ニシテ兼ヌルニ縝密ヲ以テシ又大小ノ  
 庶務ニ於テ確乎タル成算アルニ非レハ敢テ輕  
 舉暴動セス其下ヲ馭スルニ多クハ其意ヲ主ト



シテ人ノ諫ヲ納レズ議院及平民ノ權利ヲ收攬  
 レ朝庭ノ百官殆<sub>ト</sub>奴僕ノ如ク驅使セラレトモ  
 人皆之ヲ覺ラス拊舞シテ其用ヲ為サントス然  
 レトモ是時舊教ノ餘孽ニビヒイトト稱スル兇  
 徒アリテ亂ヲ好ミ之カ為ニ物情穩ナラス千五  
 百八十一年此黨ノ中カニピオント云フ者叛ヲ  
 謀テ誅セラル同八十五年パルメント云フ者法  
 王ノ密諭ヲ受ケテ王ヲ暗殺セントセレカ又成  
 ラス是等ノ兇徒大抵マリイヲ以テ口實トス故  
 ニ議院ヲ首トレテ朝臣マリイヲ惡ムコト愈甚

レ〇千五百八十五年和蘭モ亦刺客アリテ奇ル  
 レム之カ為ニ暗殺セラレ土人ノ氣勢大ニ挫ク  
 再英ニ從屬レテ其カヲ借ラント請フ王其請ヲ  
 許サスト雖<sub>モ</sub>レイストルノ侯ヲ一隊ノ兵ニ將ト  
 レテ之ヲ和蘭ニ發遣セリ王又西班牙ト兵ヲ構  
 フルニ至ランコトヲ謀リ是歲別ニ戰艦二十艘  
 ヲ亞墨利加ニ遣テ西印度諸島西班牙ノ屬地ヲ  
 亂暴セシム〇千五百八十六年九月レイストル  
 島トヘンノ邑ヲ襲ヒ却テ大ニ敗ラルレイスト  
 ルハ王ノ嬖臣ニシテ將領ノ才アル人ニ非ス王



ノ人ヲ用キル大抵ハ皆其器ニ當リタレトモ獨  
 此人ノミ便嬖ヲ以テ寵ヲ得タリ○英國ノ僧徒  
 佛ノレイムニ書院ヲ設ケテ舊教ヲ唱フル者ア  
 リ其社中ニジーン、サバー、ジト云フ無頼ノ惡僧ア  
 リテ常ニ其徒ノ説ヲ聞テ我モ異端ノ魁首ヲ除  
 キ法教ノ為ニ殊功ヲ立ント千五百八十六年ノ  
 頃英ニ歸テ密ニ王ヲ覲ヒシカ又茲ニジーン、バル  
 ラルドト云フ者アリ嘗テ英國及蘇格蘭ノ間ニ  
 往来シテ法ヲ説キ土人ノ舊教ヲ奉スル者ハ皆  
 怨ヲ政府ニ啣ムヲ見テ陰ニ亂ヲ作サント謀リ

此頃、貌ヲ變シテ再、英ニ入レリ是ニ於テ二人互  
 ニ結託シテ共ニ黨類ヲ招聚セシニ又アングロニ  
 一、バビンドント云フ者亦来リ加ハル是ニ於テ  
 又マリリーヲ救ハントス然レトモ國事總裁ワル  
 シンハム早ク之ヲ覺リ計ヲ以テ悉、其謀ヲ知ル  
 コトヲ得タリ賊徒、マリリート交通スルニギッホル  
 ドト云フ僧ヲ用キル此僧賊徒ノ書ヲ持シテマ  
 リーノ獄舎ニ至リ破壁ノ隙ヨリ之ヲ傳ヘ又其  
 報ヲ得テ反命スワルシハム之ヲ偵知シ其僧  
 ヲ賺レテ悉、往復ノ書ヲ途中ニ披閱シ封緘故、



如クニシテ又之ヲ僧ニ遞與ス故ニ兇徒之ヲ覺  
 ラスワルレシハム既ニ賊徒ノ計ヲ詳悉シ急ニ  
 發シテ之ヲ逮捕シケレハ賊徒不意ニ出テ、逃  
 避スルコト能ハス首惡十四人縛ニ就キ皆法ニ  
 處ス○是ニ至テ國人又頻ニマリリーノ罪ヲ正サ  
 シトス然レトモ王尚依違シテ決セス議院上書  
 シ往復辯論時ヲ移シテ後遂ニマリリーヲノルサ  
 シンプトシ州中ハゼリシゲー城ニ遷シ公解ヲ設  
 ケテ之ヲ鞠問セント決シタリ時ニマリリー未之  
 ヲ知ラス一日馬ニ乘リ庭上ニ逍遙セシ時一人

ノ使者入り来テ王ノ命ヲ傳ヘテ曰クバビント  
 シ等ノ隱謀既ニ發露シテ罪魁悉法ニ處ス王又  
 后ニ問フコトアリ臣等ヲシテ后ヲ別所ニ移サ  
 シムトマリリー之ヲ聞テ始メテ驚キ室ニ歸テ旅  
 裝ヲ修セント請ヒシカ使者之ヲ許サス直ニ之  
 ヲ警衛シテハゼリシゲーニ誘ヒ行キタリ斯テ  
 其後數日官吏王ノ命ヲ受ケテマリリーヲ究訊ス  
 マリリー口ヲ極メテ辨解セシカ既ニバビントシ  
 ノ首伏アリ其他證跡明白ニレテ其罪終ニ逃ル  
 可カラス官吏倫敦ニ歸テマリリーノ罪死ニ當レ



リト及命ス其前ヨリ王頻ニマリーヲ除クニ意  
 アリ此ニ至テ心中竊ニ大ニ悦ヒシカ尚言ヲ飾  
 テ遠ニ之ヲ許サス議院大臣抗疏シテ切請スル  
 ニ至リ乃唱言シテ曰クマリーノ罪若恕スハク  
 ハ我怨ハ固ヨリ論スル所ニ非ス然レトモ我今  
 輿論ニ從テ其罪ヲ正サハルコトヲ得スト翌年  
 二月一日遠ニ書記官ダビソンニ命レテ死罪ノ  
 憑書ヲ作ラシメレカ翌日國璽ヲ押スルニ蒞テ  
 王又俄ニ之ヲ止ム然レトモ議官等王ノ濡滯ニ  
 堪ハサレハ他日王ノ譴怒ニ逢フトモ我輩其罪

ニ當ラントテダビソンヲ促シ其書ヲ監使ニ附  
 シテ發遣シタリ是ニ於テ千五百八十七年二月  
 八日マリー遂ニハゼリシゲル城ニ斬殺セラル  
 時ニ年四十五歳始メテ英國ニ幽囚セラレテヨ  
 リ幾<sub>下</sub>十九年ナリ王マリーノ死ヲ聞テ又伴リ怒  
 テ曰ク我既ニマリーノ死ヲ許スト雖未<sub>下</sub>之ヲ今日  
 ニ期スルニ非ス執事者倉卒ニレテ余ヲシテ愛  
 妹ヲ殺サンメタリト是ニ於テダビソンヲ捕ヘ  
 テ之ヲ獄ニ投シ課スルニ一万ポンドノ贖金ヲ  
 以テス凡<sub>下</sub>王ノマリーヲ遇スル終始曖昧ニシテ



人皆其意ノ寓スル所ヲ知ラス蓋竊ニ外國ノ譏  
 ヲ憂ヒ又蘇格蘭ト怨ヲ構ヘンコトヲ懼レ徒ニ  
 己ノ罪名ヲ免レンコトヲ欲セルナリ然レトモ  
 淺薄ノ詐術固ヨリ天下ノ眼目ヲ掩フニ足ラス  
 其醜愈掩テ愈彰レ却テ後世ノ笑ヲ貽セリ洋人  
 之ヲ論レテ曰ク矯飾虚偽ノ人ニ於ケル最惡ム  
 ヘキノ大ナルノミナラス又笑フヘキノ甚レキ  
 者ナリト蘇王ゼームス其母ノ生前ヨリ屢英王  
 ノ過酷ヲ争ヒレカ其死ヲ聞テ大ニ怒リ國人亦  
 辱ヲ雪カント一時憤激セレカワルレシハハニ

國ノ間ニ周旋シテ巧ニ事情ヲ陳謝シ事遂ニ止  
 ムコトヲ得タリ○西班牙王ヒリプ英國ノ屢和  
 蘭ヲ援クルヲ憤リ且法教ノ故ヲ以テ大舉シテ  
 英ヲ攻メントシ是ヨリ前數年ノ間水軍ヲ訓練  
 シ武備ヲ充實シテ頻ニ其備ヲ為レ、カ千五百  
 八十八年ニ至テ戦具始メテ整ヒ水師悉クスボ  
 ン此時葡萄牙ノ港ニ次ス其艦數大小百三十艘  
 礮煩ニ千四百三十門戦卒凡ニ二万人當時ニ在テ  
 ハ實ニ盛舉タリ西人皆誇テ謂ヘラク之ヲ以テ  
 英ノ海岸ニ臨マハ葛爾タル小島真ニ壓倒スル



ニ足レリト因テ名々テ無敵軍ト曰ヘリ時ニ英  
ノ水軍未盛ナラス政府ノ戦艦僅ニ三十四艘國  
中ノ水夫ヲ舉テ一万四千ニ過キス然レトモ國  
人警ヲ聞テ踴躍シテ皆戦ハシコトヲ欲シ貴族  
富商私ニ船艦ヲ装ヒ倫敦ノ如キハ兵艦戦卒共  
ニ課數ノ一倍ヲ備フルニ至レリ王是等ノ軍ヲ  
部署シボーワルドヲ以テ其都督トシドラーク  
ハウキンスフロビヤセル等ヲ分ケテ其下ニ屬セ  
シム此輩ハ皆一時ノ名將ニシテ其名聲歐洲ニ  
傳播セル者ナリ王又陸軍ヲ分ケテ三隊トシニ

万人ハ南海ノ防禦ニ備ヘ又一隊三万人ハテ  
ムス河口ニ置テ都府ニ備ヘ其餘三万人ハ王自  
之ヲ令ス王テームス河口ノ軍ニ至リ陣列ノ間  
ニ往来シテ將士ヲ勵マレテ曰ク余ハ脆軟ノ一  
女ナレトモ苟モ一國ノ主トナリテ其國ノ覆滅  
ヲ見ルニ忍ヒス汚辱ヲ後世ニ貽サンヨリハ寧  
屍ヲ戰場ニ曝サント思フ汝等衆士國家ノ為ニ  
勉勵セスハ有ル可ラス我今汝カ先トナリテ自  
進退ヲ指揮レ功アル者ハ大ニ之ヲ賞セント是  
歲五月二十九日メシナノ侯某西軍ヲ督シリス



ホンノ港ヲ發セシカ其海路颶風ノ為ニ船ヲ壞  
 ラレ七月十九日始メテリザルド岬ノ海上ニ出  
 テタリ英ノ總督ホーワルド乃ポルツマウスヨ  
 リ出テ、之ヲ迎ヘ廿一日ノ朝兩軍始メテ戰ヲ  
 合セレカ時ニ英ノ艦數ハ僅ニ六十七艘其大小  
 モ亦迥ニ西軍ニ及ハスホーワルド令ヲ諸船ニ  
 傳ヘテ曰ク敵ハ巨艦ニ乗セリ安ニ近ツキテ覆  
 没スルコト勿レ只其船ヲ勒シテ徐ニ敵ノ過隙  
 ニ乗セヨト貴族私裝ノ舟船諸港ノ中ニ屯聚セ  
 ル者海上戰鼓ノ聲ヲ聞テ争ヒ出テホーワルド

ノ軍ニ加ハリ共ニ西軍ノ後ニ踵シテ且進ミ且  
 戰ノ兩軍ノ船艦相合シテ三百艘舳艫相啣シ帆  
 影海ヲ蔽テ滿目殆船ヲラサルハナシ西將メン  
 ナハ未ダ水戰ニ習ハス加フルニ其艦ノ高大却テ  
 運用ニ便ナラス礮門亦高キニ過キテ其丸遙ニ  
 空際ニ迸飛シテ英船ニ中ル者ハ幾何モナシホ  
 ーワルド之ヲ見テ大ニ悦ヒ遂ニ軍ヲ縦テ接戰  
 レケレハ西軍之カ為ニ辟易シ其中大艦二艘ア  
 リ一ハ自火ヲ發レ一ハ帆檣碎裂セラレ共ニ下  
 ラリクノ為ニ奪收セララル此時西將パルマノ侯



二万三千ノ兵ヲ聚メテフランドルスニ在リ西  
ノ戦艦先之ヲ舟中ニ迎ヘテ後テームス河ニ遡  
ラント計リ直ニドンキルクニ向テ前進シ此月  
二十七日カレイノ海口ニ碇泊ス英船ハ尚之ヲ  
逐テ尾レ来リ此日西軍ヲ距ルコト二里許ナリ  
夜中ホーワルド又一計ヲ案シ密ニ火船ヲ以テ  
敵中ニ放チケレハ西軍大ニ驚キ碇ヲ拔クニ遑  
ナク各其纜ヲ断テ四方ニ逃散シ隊列大ニ亂ル  
翌日黎明英人之ニ乗シテ又十二艦ヲ奪ヒタリ  
此ニ至テ西軍既ニ勝利ヲ失ヒパルマ亦辭ヲ設

ケテ其兵ヲ進メスメジナ己ムコトヲ得スレテ  
遁逃ノ計ヲナシカ適西南風劇シクシテ海峡  
ヲ出ツルニ由ナク遂ニ蘇格蘭ヲ繞リ大洋ニ出  
テ、本國ニ歸ラント同二十九日風ニ從テ北發  
セシカ八月二日日耳曼洋ニ於テ再颶風ニ逢ヒ  
其船颶蕩四散シテ蘇格蘭ノ海濱ニ漂著セル者  
三十餘艘波濤ノ為ニ破碎セル者數ヲ知ラス本  
國ニ歸リシハ僅ニ三分ノ一ニ過キスト云フ○  
千五百八十九年フランシス、ドラークジョン、ノル  
リス及エセクスノ侯等葡萄牙ノ海岸ニ寇シテ



前年ノ役ニ報シリスボンノ外廓ヲ陷レテ歸ル  
 ○此時佛國ノ内亂未止マス千五百九十一年王  
 エセックスノ侯ヲ佛ニ遣リ是ヨリ同九十八年ニ  
 至ル迄時々兵ヲ遣テ其王ヘンリーヲ救援ス○  
 千五百九十六年西人再舉レテ英ニ來寇ストノ  
 風説アリ王又エセックス及ホーワルドヲ水陸ノ  
 軍ニ將トレテ西班牙ニ遣ル此軍途中ニカジ  
 スヲ攻メテ之ヲ陷ル此役エセックス獨ホーワ  
 ドノ議ニ成テ勝ヲ得タリシニ其後王ホーワ  
 ドヲノッチンハムノ侯ニ封シエセックスノ功ハ置

テ問ハスエセックス是ヲ以テ不平ヲ懷クト云フ  
 ○愛倫ハ土俗犷悍ニシテ制レ難ク是ヨリ前四  
 百年ノ間常ニ英ノ屬國ト稱スレトモ唯其名ノ  
 ミニ過キス此頃土酋ニヒリ、オニールト稱スル  
 者アリ其従弟ヲ殺シテ叔父ノ遺産ヲ奪フ英王  
 之ヲタイロンノ侯ニ封レテ招徠スレトモ従ハ  
 ス密ニ西班牙ト通レテ頗ニ英ノ兵ヲ破リ千五  
 百九十九年ニ至テ其勢漸ク猖獗ナリ是ニ於テ  
 是歲四月王一万八千ノ兵ヲエセックスニ附シテ  
 之ヲ愛倫ニ遣リシニエセックス亦之ヲ制スルコ



ト能ハス私ニ賊首ト和ヲ約ス王怒テ之ヲ責ム  
 ルニ及テ自辨解セント軍ヲ棄テ、英國ニ歸リ  
 たり是ニ於テ王愈怒リ之ヲ其家ニ禁錮シモン  
 トジョーイヲシテ其軍ヲ代領セレム○エセクス  
 ハ剛勇ニシテ能ク戦ヒ又才幹アリレイストル  
 ノ死後王ノ殊寵ヲ受ク其性侃直ニシテ嘗テ劍  
 ヲ案レ王ヲ罵リシコトアレトモ王之ヲ罪セス  
 愛倫ヨリ歸テ後憂懼シテ病ヲ生スト聞キ王再  
 哀憫ノ情ヲ發レ自其家ニ就テ病ヲ問ヘリ其後  
 候屢哀訴シテ其罪ヲ謝セレカ仇人ノ為ニ阻隔

セラレテ其言王ニ達スルコトヲ得ス後某ノ事  
 ヲ請フニ及テ王之ヲ聽サスレテ曰ク暴戾ノ野  
 獸ハ食ニ飽カシム可カラスト候之ヲ聞テ大ニ  
 怒リ王ヲ罵テ曰ク老婆近來其心腰ト共ニ屈曲  
 セリト是ヨリ深ク怨望レ千六百一年黨ヲ結テ  
 倫敦ヲ亂リ終ニ誅ニ伏ス○モントジョーイ愛倫  
 ニ至テ後連ニ土兵ヲ破リ千六百二年ニ至テタ  
 イロン終ニ降服シテ全島再平定セリ○千六百  
 三年三月二十四日王死ス年七十在位四十五年  
 ナリ始エセクスノ盛時王其粗暴ニシテ終ヲ令



クセサルヲ慮リ他日若窮厄ニ罹ルコトアラハ  
 我此環ヲ見テ必汝カ命ヲ救ハント一箇ノ指環  
 ヲ取テ之ニ授ク後侯ノ刑セラルニ當テ王頻  
 ニ之ヲ憐ミ窃ニ其哀ヲ請フヲ待チシカ侯終ニ  
 之ヲ請ハス是歳々チンハムノ侯ノ妃死ニ臨テ  
 王ニ見エント請ヒケレハ王自其家ニ至ル妃一  
 環ヲ出シ王ニ獻レテ曰ク此環ハエセクスノ刑  
 ニ臨テ妾ニ託セシ者ナリ然レトモ妾良人ノ為  
 ニ制セラレテ之ヲ王ニ獻スルコトヲ得ス妾今  
 上帝ニ見ユル時至レリ聊之ヲ以テ生前ノ罪ヲ

除セント王之ヲ聞テ忽慟哭レ手ヲ以テ妃ノ背  
 ヲ拊レテ曰ク神或ハ汝カ罪ヲ恕ストモ余ハ決  
 シテ恕スルコト能ハスト是ヨリ悲愁鬱結シテ  
 病ヲ醸シ終ニ起タスト云フ遺命レテ位ヲ蘇王  
 ゼームスニ傳ヘレム史家王ヲ論シテ曰ク王ノ  
 端嚴強毅仁慈明察ハ前王ノ中多ク其比ヲ見ス  
 唯惜ラクハ雍和謙虛ニ乏シク且人ニ接スルニ  
 詐術多キヲ以テ未真ノ良君タルコトヲ得スト  
 王又其心ヲ制レテ過激ヲ抑ヘ私慾ヲ懲セリ然  
 レトモ又甚嗤笑スヘキ者アリ常ニ己ノ容色ヲ



愛シ頻ニ其顔ヲ粉飾シ死ニ至ル迄衰ヘス其老衰ヲ言フ者アレハ之ヲ怒ルコト最甚シ又常ニ寵臣ヲ昵愛シテ其惑溺ノ甚シキ幾痴騃ノ如レト云フ○ヘンリー第七世ノ位ニ即テヨリ是ニ至ル迄五世凡百十八年ニシテモードルノ統絶ス此朝ノ間之ヲプランタゼットノ時ニ比スレハ議院ノ權却テ盛ナラス其因固ヨリ一ナラスト雖概シテ之ヲ論スレハプランタゼットノ間反亂相踵テ繼嗣多クハ篡奪ニ由レリ故ニ歷世ノ君主議院ニ結テ其位ヲ固クシ常ニ其決ヲ仰

キシカテモードルノ朝ニ至テハ世次相承ケテ繼立全ク其力ヲ假ラス之ニ加フルニヘンリー第八世及エリサズスノ如キ并ニ有為ノ君ニシテ百事ヲ擅制シ他人ヲシテ容易ニ喙ヲ容レレメス議院ノ衰兆職トレテ是ニ由レリエリサベツスハ議院ヲ輕侮スルコト最甚シク千五百九十七年ノ間兩院評定ノ議案四十八條ヲ排拒スルニ至リ又院中ニ就テ二名ノ議員ヲ捕縛セシコトアリ此二王ハ英邁ノ資アリテ其力能ク臣屬ヲ壓服セルヲ以テ當時敢ヘテ背ク者無カリレカ



其害他日ニ至テ發見レ遂ニ前古未有ノ大禍ヲ  
 惹キ起シ、ハ後王自、其カラ揣ラマ又時勢ヲ察  
 セサル罪ニ由ルト雖モ二王實ニ其端ヲ啟キレナ  
 リ此頃ベ子ボレレンスト名クル者アリ我邦俗  
 用金ト稱スル者ト甚相類似セリベ子ボレニ  
 スノ字ヲ譯スルハ冥加金ナド云フ義ニレテ其  
 始ハ貴族富商ノ類政府ニ事アルニ當テ自其金  
 ヲ獻シ國恩ニ報スルヲ主意トス然レトモ後世  
 ニ至テハ國王ヨリ嚴命ヲ以テ之ヲ課此事プラ  
 ニ終ニ一種横斂ノ賦税トナレリ  
 タゼ子トノ間最盛ニレテ五ードルノ朝ニ至テ  
 ハ大ニ衰ヘタリト雖モ時々尚其例アリ又モ、ボ  
 リト稱シテ一種專賣ノ制アリ我邦ノ所謂株  
 式ノ類ニテ稍

其制ヲ異ニシ君主其證ヲ臣民ニ賜テ寵榮ノ具  
 トセリ方今專賣ノ法ハ新奇ノ術ヲ勸奨スル所  
 以ニシテ固ヨリ其害ナシト雖、此頃ハ以テ  
 或ハ内官近堅ニ賜レ且專賣ノ物品多クハ塩  
 醋鉛錢等ノ類ニテ之カ為ニ日用ノ諸物俄ニ工  
 其價ヲ増レ人民其害ヲ被ルコト淺シナラズ  
 リサベッスノ末年此弊其極ニ至リ議院終ニ王ニ  
 迫テ之ヲ廢ス然レトモ尚未全ク止マスト云フ  
 英國ニ於テ海軍ニ名ヲ得レハエリサベッスノ朝  
 ニ始マリ航海ノ術亦此時ヨリ大ニ進歩シテ五  
 一ドールノ末年此術ニ名ヲ得ル者多シ千五百八  
 十五年ノ頃ワルトル、ラレト云フ者亞墨利加  
 ニ至テ始メテビルダニアノ地ヲ開墾ス是英國

改正  
 四十二

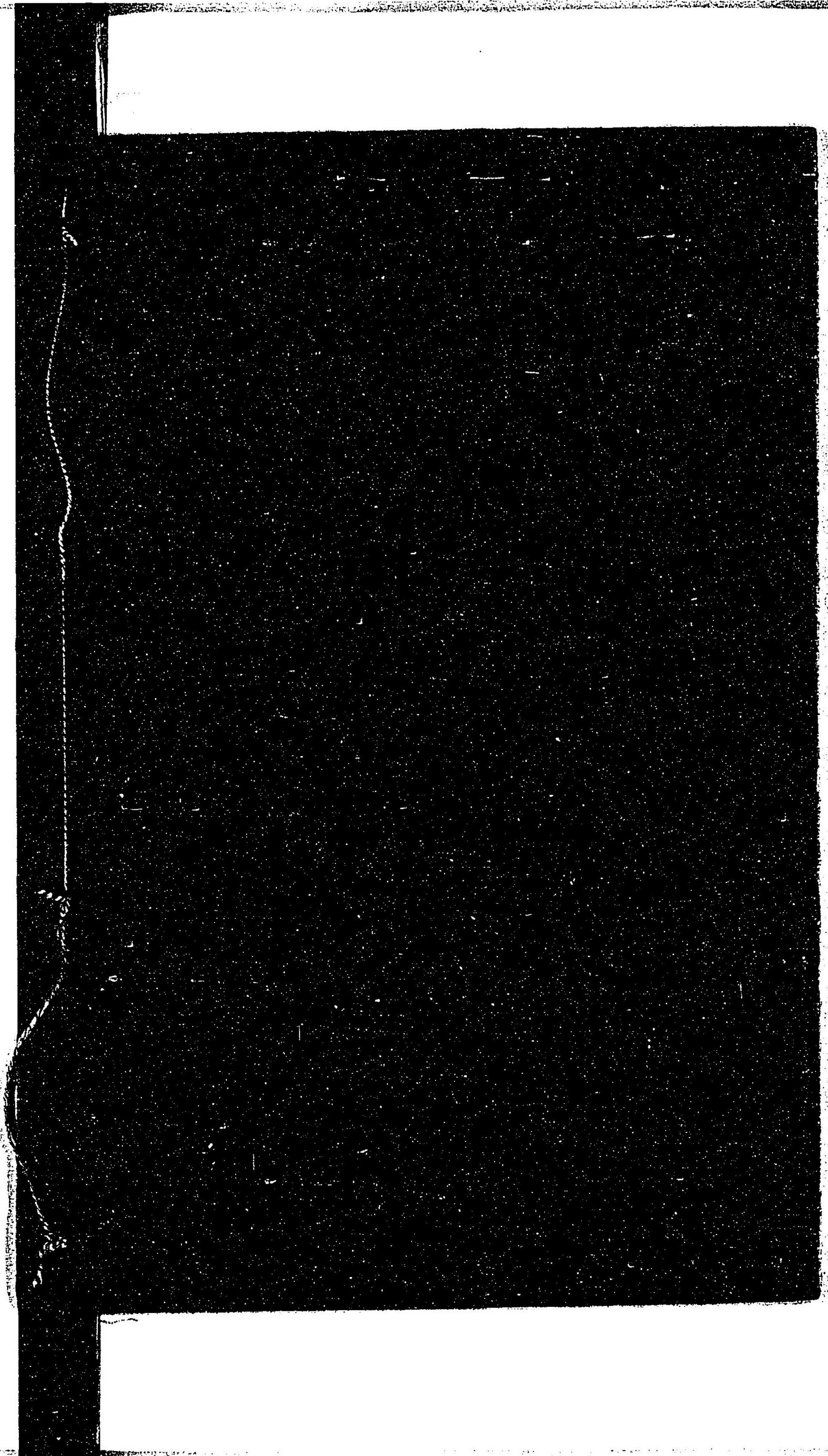


ノ民ヲ西洲ニ移シ、始ニシテ當今合衆部ノ濫  
觴ナリ

今邨 亮 校

改正 英史卷五終







東 京 國 立 書 院

一 冊	四 六 号	二 架	五 层	新 八 世
--------	-------------	--------	--------	-------------

